

CONTENTS

02 特集

甲南の輝き人

- 03 広島東洋カープ ドraft3位指名
岡本 駿さん
- 07 Red Bull BC One 学生部門優勝
ブレイキンダンサー 藤ヶ崎 大海さん
- 09 地域連携センター 学生コーディネーター
「なんティア」代表 森川 遥菜さん
- 11 全国高等学校総合文化祭 囲碁部門団体戦優勝
歳安 輝さん
- 13 なるほど! 甲南アカデミア
理工学部 物理学科 准教授 高吉 慎太郎
量子コンピュータで科学研究は爆発的に進化する!?
「量子力学」で開く未来の扉
- 15 さまざまな分野の第一線で活躍する卒業生
It's KONAN Style
小説家・会社員 遠藤 辰良さん
- 17 高中TOPICS
甲南祭・六甲登山
- 19 KONAN TOPICS
- 21 特集
いまオープンキャンパスが熱い!
大学の魅力を伝える甲南大生の
活動レポート
- 25 甲南解体新書 #06
摂津祭の思い出をたどって
- 27 岡本ぶらり 第16回
番外編 あしや今昔
- 29 KONAN FORUM
課外活動成果報告 /
新刊一覧 ほか

裏表紙 Nanbo Today

表紙の1枚
わたせせいぞろいが描く「甲南」の日常
THEME「甲南大学」
～世代・背景を超えて夢を語らう～

特集

甲南の 輝き人

若さと情熱にあふれ、挑戦を続けるまぶしい姿がある。
スポーツや文化、社会活動の分野で活躍する学生たちの
一人ひとりの輝ける力をお届けします。



甲南大学体育会硬式野球部
経営学部 経営学科 4年次

岡本 駿さん

Shun Okamoto



甲南大学初！ プロ野球選手の道へ

ピッチャーマウンドに立つと、より大きく見える186cmの長身。

その右腕が投げる球は、プロも注目の最速149キロ。

2024年プロ野球ドラフト会議で、広島東洋カープから3位指名された岡本駿さん。

本格的に投手を志したのは、意外にも甲南大学に入学してからだといいます。

高校時代は内野手(遊撃手)だったという岡本さんの野球ヒストリーとプロへの抱負を語っていただきました。

広島東洋カープは選手育成に定評がある球団。
「一番良い球団に入った」と周囲からも祝福されている。



試合を見に来たスカウトマンの姿に 初めてプロを意識するように

3年生の終わりごろから、私が投げる試合をプロ野球や社会人野球のスカウトの方が見に来てくださるようになり、自分にもプロの可能性があるのかと思い始めました。自分の野球がプロの世界で通用するのか。正直なところ迷いもありましたが、監督に強く背中を押され、心を決めました。

ドラフト会議で指名してもらうには、まずプロ野球志望届を提出します。その後、各球団から指名する可能性がある選手に調査書が届くという流れになっています。2024年は9月1日から10月10日までの期間で志望届を提出できたのですが、例年ドラフトで上位指名が確実視されるようなスター選手は早めに出す傾向があるらしく、私も監督も初めてのことでそんなことはつゆ知らず、受付開始すぐの9月6日に志望届を提出。あとから知って、かなり焦りました。最終的には5球団から調査書を受け取りましたが、プロ野球全



プロの練習についていけるよう、
今から身体づくりに余念がない。
トレーニングチューブを利用して
肩の裏の筋肉を鍛える。

徳島育ちの野球少年 プロなんて考えたこともなかった

野球を始めたのは小学2年生。子どものころから身体は大きいほうで、近所のお兄ちゃんから少年野球の助っ人を頼まれたのがきっかけです。それまではサッカー少年でしたが、野球を始めると父がキャッチボールを教えてくれて、それが楽しくて野球にハマっていききました。ちなみに父は大学まで野球をやっていたそうです。「プロ野球のスカウトマンは母親の運動神経を確認する」なんて聞きますが、どうでしょうね。母は「私も運動神経は良かった」と言っていますが（笑）。

小学校、中学校では投手でしたが、城南高校では内野手としてプレーしました。ポジションは遊撃手で、打者としてもチームの主軸を担っていました。とはいっても、甲子園常連校という高校ではなかったため、当時はプロになるなんてまったく考えたこともありませんでした。

遊撃手として活躍した高校時代 進路指導で勧められた甲南大学へ

野球に夢中になる日々を過ごすうち、進路を考える時期になりました。甲南大学への進学は、高校野球部の監督に勧めていただきました。学力はもちろん、硬式野球部が阪神大学野球連盟1部リーグに所属していること、体育会系バリバリの厳しい雰囲気ではないことも私の性格に合っているのでは、とのことでした。1部リーグでプレーできることにとても魅力を感じ、学業はもちろん就職にも強いと

驚きのドラフト3位指名で 広島東洋カープへ

ドラフト当日は、学内で記者会見が開かれました。一般的には記者の方たちと一緒に中継画面を見ながら自分の名前が呼ばれるのを待ちますが、どこからも指名されなかった場合に受ける精神的なダメージを考えると、記者の方や野球部員たちとは別の部屋で、監督や両親と一緒に中継を見ることにしました。だからカープからの3位指名には本当に驚きました。記者会見後に野球部員たちが待つ会場へ行くと、わっと寄ってきて、たちまち取り囲まれて。みんな大喜びしているのを見て、うれしくて少し泣きそうになりました。

カープのスカウトの方には、「伸びしろを買った」と言っていたみたいです。2021年のドラフト1位でカープに入団した黒原投手がまだ関西学院大学の4年生だったころ、当時1年生だった私が試合で投げ合っていたことを覚えていてくださり、「よく4年間でこれほど伸びた」と、褒めていただきました。

今は入団に向けて、プロとしてやっていくための身体づくりや投げ込みに取り組んでいます。将来は球速160キロを投げられるようになりたい。先発ローテーションの一角を任せられ、10〜15勝できるような大投手をめざしてがんばります。

関係者からのメッセージ

広島東洋カープ スカウト 鞘師 智也氏

2021年に黒原拓未投手（当時関西学院大学4年生）を見に行ったときの対戦相手として登板していた姿を見て注目するようになりました。力みのないフォームからコントロール良くキレのあるボールを投げる姿に、将来性を高く評価しています。2024年の阪神大学野球春季リーグでの完封勝利は印象的でした（甲南大4ー0関西国際大）。プロで先発ローテーションに入る投手になれると思います。



徳島県立鳴門高等学校 島 一輝教頭

（元徳島県立城南高等学校 野球部監督）

高校入学当初は細身で背が高く華奢な印象でしたが、そのころから遠投力があり、なおかつ肩肘の柔らかさには非凡なものがありました。鍛えるために内野手（遊撃手）の練習を続け、二年生ごろからは体つきもしっかりとしてきて、遊撃手としての能力も高まり、チームになくはならない選手となりました。怪我をせず、がんばってほしいと思います。城南高校OBたちも応援しています。



甲南大学 硬式野球部 谷口 純司監督

岡本選手は大学まで投手の知識がなかったのが逆に良かったと思います。持ち前の素直さと貪欲さで、技術面での指導を真摯に受け入れ、実践していました。長身から投げ下ろす本格派の右投げの投手で、ストレート、カットボール、チェンジアップなど多くの変化球をもち、ベンチに動じない強靱な精神力を兼ね備えています。息の長いプロ野球生活を送ることを期待しています。



大学から投手へ変更 大きな影響を受けた先輩投手

2021年春、甲南大学硬式野球部へ投手として入部。当初は遊撃手を守ってきたプライドから、可能なら遊撃手も続けたい気持ちでした。しかし、先輩たちのレベルの高さに（これは無理かも…）と、意外とすぐ諦めがつき（笑）、投手として死ぬ気でやっていたという気持ちも固まりました。まずは1年生からリーグ戦で投げることを目標に、とにかく練習に励みました。

平日の練習は部員各自で練習内容を組み立てます。私は同じ徳島県出身である投手の井村先輩と3年間ずっと一緒にトレーニングしていました。井村先輩は熱意ある人で練習量がすごく、私とはとても気が合ったようで、かわいがってもらいました。後輩である私のピッチングフォームを動画で撮って、どこを直すべ

キャンパスもダンスシーンも同じラフなファッション。
「いつでも、どこでも踊れます(笑)」。



ブレイキンダンサー
マネジメント創造学部 マネジメント創造学科 2年次

藤ヶ崎 大海さん

Kai Fujigasaki



世界をステージに ブレイキンし続けたい

オリンピックの正式種目にもなり、注目を集めるブレイキン。数千人ものダンサーたちがワールドファイナル出場を懸けてダンスバトルする「Red Bull BC One」の学生部門で優勝し、世界へ駆けのぼろうとしているブレイキンダンサー、藤ヶ崎大海さんにインタビューしました。

ブレイキンはカルチャーであり、 コミュニケーション。自分のすべて

ブレイキンとの出会いは12歳。地元のスポーツセンターにあったストリートダンス教室がきっかけです。父が若いころにダンスをしていて、音楽やファッションも含めてストリートのものが身近にありました。当時、教室で小学生の生徒は自分と双子の兄、3歳年下の弟だけ。先生は教室終了後もプライベートレッスンのようにブレイキンを教えてくれました。家では父が昔録ったダンスのビデオテープを観て、兄弟でまねをして。家でもストリートでも踊っているうちに、上達に必要なスキル、スタミナ、筋力も勝手についていきました。10代半ばから兄弟3人でレッスン活動を始め、人に教えることは動きの構造の理解度がぐっと増したことに役立ちました。

小学生のころからダンスを通じ、年齢が親子ほど離れた人々のコミュニティに入り、自分の居場所を見つけていました。ハワイから来日したブレイキンチームのみんなと、英語がほとんど話せなくてもダンスで心が通じ合えました。自分の身体一つあれば、誰とでもつながれるところが、ブレイキンのすばらしさだと思います。

2024年は学生トップダンサーに 次は世界へ駆けのぼりたい

自分の持ち味はミュージカリティで、音楽に對してのアプローチ、表現が得意です。普段から

たくさん曲を聴いているので、音のアクセントに合わせてパフォーマンスをきめられる。展開していくダンスの予想を裏切って、人がやっていないような動きでオリジナリティを発揮することが、自分のスタイルだといえます。

2024年は特にブレイキンの大会に力を注ぎました。中でも世界最高峰と呼ばれるブレイキンの大会である「Red Bull BC One」の学生部門で優勝し、日本で16人しか出場できない「Cyphe r J a p a n」に出場できたことは、自分史上最高の体験です。「Red Bull」では、予選を上位通過で勝ち抜けたことの喜びと同時に、ここで惜しくも敗れてしまった人が確実にいるのだという実感がありました。そのとき、自分が踊れることが当たり前じゃないのだと、今までに入ったことのない「勝負モード」のスイッチが入ったことを覚えています。「ダンスを楽しむ」とはまた別次元の自分が立っていることを感じました。「Cyphe r J a p a n」では上位に食い込むことができませんでしたが、世界が射程距離圏内にあるという手ごたえを得ることができ、2025年も同じ舞台に立つという大きな目標ができました。

ダンスで、生きていくために CUBEという選択をした

自分たちでレッスン活動をしてきたので、ダンスを通じてお金を稼ぐことに課題を感じていました。そんな自分にとって、CUBE

(マネジメント創造学部)の授業内容とカリキュラムはとても実践的で、将来のキャリアに必要な知識を得られると思います。日本では、ダンサーやミュージシャンなどの職業は、まだまだそれだけで生活できる人はわずかだと思っています。だからこそCUBEでの学びを生かし、将来的にはダンススタジオ経営やイベント主催など、ダンスをからめた独自のビジネスを確立していきたいと考えています。

平日は大学の後、レッスン活動や自身の練習に時間を割き、家に帰って大学の課題をする毎日で、休日は地元でダンスシーンを盛り上げるイベントを主催したりしています。ものすごく忙しいです。それでも、すべてに意味があると思うのがむしろらになって突っ走っています。2025年はハワイで開催される大会「ENDLESS SUMMER J A M」に日本代表として挑戦します。そこで優勝することが直近の目標です。



「Red Bull BC One Cypher Japan」でのワンシーン。

「なんティア」の代表を務めたことで、
マネジメント力がつき、自己成長を感じている。



地域連携センター
学生コーディネーター「なんティア」代表
文学部 社会学科 3年次

森川 遥菜さん
Haruna Morikawa



大学生にとってボランティアを もっと身近なものにしていきたい

甲南大学では地域連携の取り組みの一つとして、大学生のボランティア活動を促進・支援する学生コーディネーター組織「なんティア」を展開しています。その代表である森川さんに活動への意気込みと今後への思いを聞きました。

クト」に参加しました。社会問題の解決をめざして活躍しているNPOや地域団体にインタビューを行い、活動の意義や今後の課題について明らかにし、Webサイトに掲載するという取り組みで、私は児童館を担当しました。取材では、子どもたちが主体性を発揮できる計画を模索しているものの、職員の方々だけの発想では限界があること、また、幅広く物事を考えるために学生や地域住民の力が必要であると聞きました。その際に、大学生ボランティアの存在意義について強く意識づけられました。

マッチングに成功し、 地域、子どもたち、学生の 良い関係を育む

一方で、「なんティア」ではボランティアに興味はあるものの、なかなか一歩を踏み出せない学生たちに向けて、参加しやすいプログラムを開発することが課題となっていました。そこで私がインタビューした児童館に提携をお願いすることを思いつきました。「子どもたちの心を活性化できるよう、大学生も児童館とかかわってほしい」、との声があったからです。このマッチングはうまくいきました。児童館の全面協力で秋祭りが開催され、子どもたちが行う手作りブースに対し、見守りサポートをするボランティアのプログラムを作成。興味をもった学生たちの参加が実現しました。児童館が求めているものと「なんティア」の課題をつなげることができ、学生コーディネーターとしても、やりがいを感じられた体験でした。

また、子どもたちにとって、私たち大学生の姿は身近な憧れの対象になると知り、襟を正して活動に励まなければと思いました。

まちづくりに貢献したい 将来の自分のテーマもあきらかに

ボランティア活動を通じて、地域活動団体のリアルな現場の声や思いをうかがい、地域のさまざまな課題について考える機会を得ることができました。たとえば、共働き世帯が増え、家に帰っても向き合える家族がいない子どもと保護者の実態があります。他にも神戸の街づくりの一翼を担う森林ボランティアの高齢化が進み、継承者がいないという現状があります。活動に参加しなければ知ることもなく、わからなかったことです。

ボランティアを始めたころは、子どもが好きだから子どもたちと触れ合えて楽しい、といった



マッチングプロジェクトでは、15の団体とボランティア活動をしたい学生をつないだ。



ピア相談では、同じ学生の視点からボランティアをやってみたい気持ちをサポート。



「なんティア」の活動目標について、プレゼンテーションを行う。

中学生時代の先生の話が ボランティア活動を始めたきっかけ

私がボランティアを始めた動機は、中学3年生だったころ、担任の先生が大学生時代にボランティアを経験した話をしてくださり、「ボランティアを通じて多くの学びがあった。みんなもぜひやってみてほしい」ということが心に残ったからです。中高生時代は部活と勉強で過ぎてしまったので、大学生になり、やっと気になっていたボランティア活動に取り組むことができました。

これまでの約2年間で11件のボランティアに参加しましたが、私なりに強いやりがいと成長を感じています。ぜひ、この体験を一人でも多くの学生に味わってほしいという思いで、学生とボランティアをつなげて支援する「なんティア」の代表を務めています。

私たちが2023年に行った調査に協力していただいた甲南大生の約8割が「ボランティア活動に興味がある」と答えています。しかし、実際になんらかのかたちで活動に参加している学生はアンケート回答者の約3割でした。こういったギャップを少しでも埋めることができるよう、誰もが気軽に体験できることを念頭に、メンバーとともに活動に力を入れています。

児童館への取材によって 学生ボランティアの重要性を意識

「なんティア」のサポート活動とは別に、私自身がボランティアの経験を積むため、2年次に大学で開講された「NPOデータベースプロジェクト

ことで満足感を得ていました。しかし、活動の幅と深さが増していくにつれ、感じ方、考え方にも少しずつ変化が生まれました。世の中には、営利を追求せず、社会を良くしたい一心で活動している人がたくさんおられます。そういった方々の利他精神に頼るばかりでは、立ち行かなくなります。たとえば、子ども食堂を開いた人が、持ち出しの資金が尽きて続けられなくなった話も聞きました。ボランティア自体に対する支援や、問題の根本的な解決が必要だと思えます。ボランティアを通して視野が広がり、社会的な課題に対して強く思いを巡らせるようになりました。

これら一連の経験によって、私の中でNPOや地域のまちづくりについての興味が湧き、地域社会学のゼミに所属しました。将来は、地域の魅力を生かしたまちづくり、地域の課題解決やコミュニティの活性化に貢献できる仕事に就きたいと考えています。



全国高等学校総合文化祭での対局シーン。
両サイドで仲間も戦っている。

表メンバーは、学年も高校もバラバラで、実力で選ばれます。三年生である2024年は受験勉強でしばらく囲碁を離れていたため、代表の座をつかめるかどうかはギリギリでしたが、なんとか勝ち取りました。

囲碁の団体戦は主将、副将、三将の3人1組のチームで戦います。1回の対局で3人中2人以上が勝てば勝ちです。兵庫県のレベルが高いとはいえ、全国にはさまざまな強者がいます。2023年の大会では勝ち進んでいたものの、最後に負けを喫して、惜しくも準優勝でした。2024年は自分が一番上だったということもあり、一局ごとに気を抜かないよう声を掛け、チームの気合や集中力をひっぱりました。

競技は3人が横並びで、一斉に対戦相手と戦います。副将を務めた私は真ん中に座しているため、両サイドの主将、三将からも私の戦局が見えます。私がもし劣勢だと「自分は絶対に勝たなくては」と、他の2人に余計なプレッシャーを与えるため、強く気迫のある碁をビシッと打つこと、早々に相手に勝つこと、この2つを自分に課しました。

団体戦は2日間にわたり、計6回対局します。3人中1人がダメでも、あとの2人がカバーして勝つことが何度もあり、バズルのピースがヒタリとはまっていくように、良い波に乗っているような感覚で試合が進みました。「全員が勝たなくてもいい、とにかく自分のやることをやる」と、3人の意識が合致し、互いの信頼が伝わる中、全員が実力をフルに発揮できたと思います。結果、兵庫県として団体戦の優勝・文部科学大臣賞に輝くことができました。本当にうれしくて、その日はずっと楽しく、みんなが高揚感に包まれました。



囲碁を通して世界中で 最高の仲間と出会いたい

囲碁の世界は、プロをめざす場合ほとんどが幼少期から院生（プロの卵）になります。私は中学1年生で院生になれる実力があつたのですが、プロをめざすなら飛び級がしたいと考えていました。当時は学校から帰るとすぐに囲碁の勉強を始め、土日は大阪の教室やプロ棋士の先生に合宿で指導を受けるなど、囲碁漬けの毎日でした。囲碁は15歳くらいまでにプロになつておかないと、将来が厳しいといわれています。始めた年齢が遅かった私は、囲碁の勉強を続けるうちに限界を感じ、中学3年生でプロへのこだわりを捨て、囲碁を楽しんでやっていこうと方向転換しました。

囲碁将棋部
甲南高等学校 三年生

歳安 輝さん
Hikaru Toshiyasu



囲碁団体戦でリベンジ優勝 兵庫県代表として全国の頂点に立つ

文化庁、全国高等学校文化連盟などが主催する全国高等学校総合文化祭。全国から強豪が集まる囲碁部門を制したのは、兵庫県代表チームでした。2023年2位の雪辱を果たすべく挑んだ対局は激闘の結果、見事優勝。2年連続で代表を務めた歳安さんに、囲碁競技のことや魅力について尋ねました。

小学4年生で囲碁と出会い 一日10時間以上、碁盤と向き合う

幼少期から、考えて解き明かすことが好きで算数・数学教室に通っていました。転校を機に将棋を始め、小学3年生で二段を取得。しかし、近所の方に「囲碁のほうが自由度が高いよ」と勧められ囲碁に興味をもちました。

4年生の終わりごろ、初めて囲碁教室を訪れました。昭和にタイムスリップしたような教室で、「高齢の先生から「将棋が二段とはまだまだだ」と言われて、負けん気に火がつき、先生を負かすつもりで囲碁に転向を決めました。教室に通い始めたものの、すぐには対局をさせてもらえません。初歩の過程を終えると、次は詰碁（碁の局所的な戦いを問題にしたもの）です。他の子たちが対局するのを横目に、自分は壁に向かい正座で詰碁をひたすら解き続ける日々。この時期で二万問は解きました。それからやっと対局するのですが、詰碁のあらゆる問題を解いたおかげで、またたく間にいくつもの大会で勝つように。5年生で兵庫県3位になりました。その後はプロ棋士の方に先生となっていただき、中学3年生まではプロをめざして、一日10時間以上碁盤と向き合いました。

猛者ぞろいの兵庫県で 2年連続代表を務め、全国優勝へ

全国高等学校総合文化祭では、囲碁団体戦の県代表に2度選ばれました。県代表はトーナメント方式で選出されますが、兵庫県はトップレベルの実力者ぞろいで、油断できません。県代



部になりました。

高校生になり、まずは学校に囲碁部がなかったの自分で立ち上げました。強い部をめざし、友人たちを部員に勧誘。私自身は囲碁七段ですが、私のもてる全知識を注いで特訓した結果、ほぼ素人だった部員たちが1人は五段、2人は六段にまで成長しました。本人たちの努力はもちろんですが、よく自分を信じてついてきてくれたと思います。

一度、囲碁部の名門・灘高校と対局したのですが、私たちは甲南高校が勝利したほど、本当に強い部になりました。

高校二年生の冬、日本だけではなく世界を見てみたくなり、全国トップクラスの実力者たちと一緒にアジア大会に挑みました。プロや院生は参加できないアマチュアの世界一を決める大会ですが、900人以上の参加者のほとんどが韓国や中国の選手です。韓国では囲碁のプロ棋士はプロ野球選手並みのスター職業で、選手の裾野も広く、強い選手ばかりです。私が対戦した韓国の選手も、まるでAIのような正確な碁を打ちました。たまたま相手がミスをした一手から突き崩し、私が勝ちましたが、やはり世界はすごいと実感させられました。このアジア大会で、私は9位に入賞。日本人の中で最上位でしたが、1〜8位を占める韓国勢に高い壁を感じました。

大学生になっても囲碁は続けます。日本の大会で全国優勝、アジア大会でも優勝をねらっています。囲碁で戦った世界中の仲間たちとの交流もこれからの楽しみです。